

プロフィール

兵庫県西宮市出身。立命館大学法学部を卒業後、約 5 年間、商社の国内営業担当として勤務する。その後、学生時代から望み続けていた平和構築分野でのキャリア構築を目指して、退職を決意。イギリスのサセックス大学（MA in Conflict, Security, and Development）に進学。卒業後は、JICA のインターンシップ生として、ボスニア・ヘルツェゴビナでの民族融和・信頼醸成促進を目指すプロジェクトに参加。その後、本事業の海外実務研修においては、国連プロジェクトサービス機関（UNOPS）南スーダン事務所で国連ボランティアとして勤務。現在は、日本の NGO（日本国際民間協力会）に所属し、ガザの緊急人道支援・復興プロジェクトの現地調整員を務めている。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

平和構築人材育成事業に応募した最大の理由は、国連機関の現地の事務所に最長 1 年間派遣され、現場の実務経験を積む事が出来ると考えたからです。私は、大学卒業後、民間企業で国内営業担当として勤務していたので、国際協力分野での現場経験は元々ありませんでした。そのため、大学院のコース終了後、現場での経験を積むため、JICA のインターン制度に申し込みました。技術協力プロジェクトの現場でインターン生として事業に携わるにより、非常に有益な経験を積む事が出来ましたが、さらに長い期間で、インターン生よりも大きな役割や責任が与えられ、現場での実務を経験出来る機会が必要でした。その中で、平和構築という分野で大きな役割を果たす国連、その現地事務所で実務を行う経験が得られる本事業は自分のキャリア構築のために、最適な選択肢だと捉え応募致しました。また、海外派遣前の国内研修では、既に平和構築の分野で豊富な経験、実績を積まれた講師の方々によって、プロジェクトコーディネーション、マネジメント等の具体的な実務に関わるスキルを、他の研修員とともに実践的な形で学ぶ事が出来るという事も、当事業に応募したもう一つの大きな理由でした。

2. 国内研修の感想は？

非常に実践的な研修だと思いました。とりわけ印象的だったのが、特定の場面を想定し、各研修員がいくつかのグループに分かれて、各国連機関のスタッフとして、限られた時間の中で行われたロールプレイ形式の研修です。人道危機の局面では、各国連団体が支援内容のコーディネーションを行い、案件形成を想定した場面では、実際のファンドから資金を得るためにプロポーザルを作成しました。このような形での研修は、現場での実務と直接繋がっており、海外研修前に有益なものだと感じました。また、国内研修では、約 1 ヶ月に渡り、他の研修員と共に生活をする事となります。そのため、昼間の研修中や、研修が終わった後でも、それぞれ異なるバックグラウンドを持つ研修員からそれぞれの平和構築分野での経験や思いを聞くことが出来ました。例えば、同期の研修員には、本コースに参加する前に NGO のスタッフとして、南スーダンに勤務していた研修員がいたので、現場での状況や業務について聞くことができました。また、それぞれの話をする中で、私自

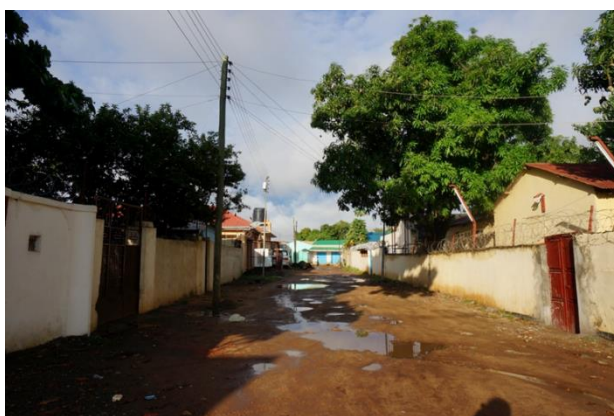
身、非常に大きな刺激を受けましたし、同時に、研修員同士の結びつきが強くなりました。国内研修を終え、海外実務研修では、基本的に各研修員は、別の国、別の国連機関に派遣されますが、その後も連絡を保ち、その後の進路の相談を行ったりしています。私も、海外実務研修後に、平和構築の分野の中でもどのような方向に進むべきか悩んでいた際に、同期の研修員に相談して、非常に有益なアドバイスをもらうことができました。

3. 海外実務研修での活動内容・感想を教えてください。一番印象に残っていることは？

海外実務研修では UNOPS の南スーダン事務所に、Monitoring & Evaluation (M&E) Specialist として派遣されました。派遣先としては、上記の実際の派遣先以外の選択肢も提示頂いたのですが、南スーダンが自分の以前から希望していたアフリカの国で、平和構築の最前線であること、また、M&E という専門性が今後自分のキャリア構築で重要だと考えて上記のポストを志望して、実際に派遣されることとなりました。



【UNOPS 南スーダン事務所の様子】



【松村さんが住んでいた家の辺りの様子】

UNOPS 南スーダン事務所では、インフラ開発が主な事業であり、私の M&E Specialist としての主な業務は、UNOPS 南スーダン事務所が実施する案件の事業期間を通じた M&E の実施と管理を行う事でした。具体的には、（１）各プログラム、各プロジェクトレベルでの M&E の枠組み、評価方法を設計し、それに沿って具体的な評価指標の選定を行い、（２）事業期間全体での M&E 活動の計画、予算を立て、（３）フィールドや資料ベースでの調査を含む評価の実施（ベースライン調査、中間評価、最終評価）、（４）そして評価結果のレポートिंगとなります。また、M&E 自身は、フィールドに拠点が無いため、プロジェクトチームからのフィールドでの車や宿泊場所の手配などサポートを受けることが必要でした。そのため、プロジェクトチームから事前に理解を得る事と、現場での協力を得る事も実際に M&E を行う上で不可欠で、そのための協議や調整も行いました。フィールド調査においては、事前に質問内容を作成した上で、主に事業の直接の裨益者となる住民や、他の同じ地域で活動する NGO、他の国連機関職員等へのインタビューを行いました。

ここでは、私が M&E Specialist として携わった案件の中でも、特に平和構築との関連が強く、実際にフィールドで調査を行った South Sudan Recovery Fund (SSRF) プログラムの案件と調査の内容について紹介させて頂きたいと思います。

SSRF は複数のドナーが拠出したファンドを、インフラ整備や生計向上支援の事業を通じて南スーダンの人々に平和の配当を提供するもので、複数の段階（ラウンド）に分けて実施されています。私が所属した期間に実施されていた SSRF プログラム（ラウンド3）は、州レベルでのセキュリティーや基本的な行政サービスを向上させる事を主な目的としていました。

私の M&E としての業務は、まず、SSRF の枠組みで州毎に行った4つのプロジェクト全体のスケジュールの作成でした。そこから、前任の M&E Officer の方が準備していた評価の枠組みや評価指標に関して、上司の指導のもと、必要に応じて追記、修正を行い、評価枠組、方法、スケジュールを明記した「Scope of work」という書類を作成しました。4つの SSRF 案件の中でも、Warrap 州のプロジェクトについては、ちょうど事業期間の終了を迎え、事業の最終評価を行う為に、フィールド調査を実施し、実際に、事業実施地の行政官、警察官、及び、住民にインタビューを行いました。Warrap 州では（他の州でも同様に）、他の民族との家畜の奪い合い、また同じ民族同士でも家畜に関連した衝突が頻繁に起こっていたため、上記の問題に対応して、不足していた遠隔地における警察署の設置と、これまで道路がなかったため、犯罪や紛争が起こっても警察が現場に到達する事が困難だった集落に繋がる道路の建設を行いました。そして、その効果を検証するための調査の一環として、住民へのインタビュー（建設した道路沿いの集落に住む20人（男性13人、女性7人）を対象）を行いました。その結果、プロジェクトの実施前は、警察のサービスに対して、全ての人が不満足か非常に不満足であったと答えたのに対して、プロジェクト実施後では、全ての人が満足か非常に満足との回答を得られることができました。その中で、彼らの村で紛争・犯罪が起こってもすぐさま警察が駆けつけることが出来、コミュニティー内での衝突、または外からの襲撃も無くなったとの声が多数ありました。実際に、フィールド調査を行った行政区域での民族間の衝突は、事業開始の年の1月～7月までには3件報告されていたが、事業終了の年の同月期間内では、0件となっていました。



【Lakes 州でのフィールド調査に向かう際に利用したヘリコプター】



【Lakes 州で行ったフィールド調査の様子】
（UNOPS 南スーダン事務所の事業が支援している学校の教師と地元住民）

上記の通り、M&E は、実際に事業を実施する立場ではありませんが、ある問題があって、それに対する取り組み（intervention）が適切な効果をもたらすものかどうかを確認することの重要性を、自分が現地に行って調査を行い、その結果をまとめることで改めて感じることができました。

上記の案件を例にとると、事業実施地での犯罪や紛争の減少は、恐らく UNOPS が実施した本プロジェクトのみに起因する訳ではありませんし、案件の評価を行う際には、評価方法や評価項目の設定、構築、それに伴う指標の選定等、常に精査が必要だと思います。ただ、平和構築を含む国際協力の案件で、事業活動（activity）をただ行うだけでなく、本当にその「activity」が元々の問題・課題を解決するため、実際に具体的にどのような「Outcome」や「Impact」をもたらしたのか測ることが極めて重要であると思います。その上で、事業が実施中の評価あれば、その事業自身を、終了時（もしくは終了後）の評価であれば、今後の事業の案件形成や実施の改善に役立ててことができます。このように、私の今回の海外派遣では、M&E Specialist として具体的な成果を出すことが求められた一方で、私自身の M&E 分野での知識、経験、スキルを高めるための極めて重要な機会となりました。私自身、海外派遣前も派遣後も、事業のマネジメントや実施に関心を持ち続けていますが、事業をマネジメント、もしくは実施する側としても、M&E の考え方を持つこと、具体的な知識やスキルを持つことは重要であり、今後の私が平和構築分野で実務に携わる中で非常に役立つと思っています。



【Lakes 州で行ったフィールド調査の様子】
（UNOPS 南スーダン事務所の事業が支援している学校の生徒たち）

4. 今後のキャリア・プランを教えてください。

現在、私は日本国際民間協力会という NGO で勤務しております。日本の本部で、海外事業のサポートとファンドレイジングに携わった後、ガザ地区で発生した武力衝突に伴う人道危機に対する支援事業の現地調整担当としてパレスチナに赴任しております。事業内容として、まず 2014 年 8 月から 10 月にかけては、現地 NGO と協働で、食料や非食糧の援助物資 (NFI) の緊急配布を行いました。11 月からは被災農家の生計手段の早期回復支援を目的とした事業を開始しており、今回の戦闘で水のアクセスが困難になった農家に対する簡易貯水施設の建設（パレスチナでは冬が雨季にあたり、雨水の有効活用を目的として）、破壊された温室の再建、作物の苗木の配布を行います。事業期間としては今の所、来年の 1 月末までを予定しておりますが、次のファンドを頂くことができれば、所属団体としても継続してガザの支援を行う予定で、急遽、他の事業の担当へ異動することがない限り、引き続きパレスチナでガザ事業支援担当として勤務することになるかと思っています。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

本事業の海外研修では、M&E 分野での経験を積むことが出来ただけでなく、国連機関のカントリーオフィスで勤務できたことにより、実際に国連機関が政策レベルでどのような役割を果たしているかを知ることができました。その点で、特に自分にとって大きかったのが、上記の M&E の役割以外にも、UNDAF（「United Nations Development Assistant Framework」の略で、国連機関全体として、支援国の重点分野毎の目標や活動内容を定め、支援国政府（今回の場合は南スーダン）と合意する文書）の延長に際して、他の国連機関との調整会議に参加できたことです。特に、その会議では、M&E として評価の項目や指標の内容に関する議論に加わりました。その一方で、自分が今後も平和構築の分野でキャリアを構築し続けるにあたって、今の自分には、より現場に近いところで事業を実施する経験や能力を高める必要があると感じました。特に、私が平和構築の具体的なアプローチとして重要だと考えている対立する住民同士のコミュニティレベルでの信頼醸成、民族融和の促進に携わるためには、NGO と言った直接事業を実施する団体で、コミュニティの中で裨益者と接し、支援を行う事が必要であると考えています。そのため、上記の通り現在は NGO に所属して、事業の実施、マネジメントを行っています。今後については、正直なところ、その時その場面でどういうチャンスがあって、自分がどういう選択肢を選ぶのかわかりませんが、NGO で現場経験を積んで、そこで得た経験やスキルを持った上で、国連などの機関でより政策レベル、またはそれに近いところで平和構築に携わることも次のステップとして考えています。

6. 平和構築人材育成事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

平和構築を含む国際協力分野でこれから実際に働き始めようとしている人にとっては、どのように入り口のチャンスをつかみ、また、働き始めた人にとっては、最初のステップからどのように次につなげていけば良いか、悩まれることも多いかと思います。私も、民間企業での勤務を経て、同じことを考えながら、平和構築分野でのキャリアを重ねている最中です。その中で、平和構築人材育成事業というのは、私にとって大きなステップであり、現在、更には将来に渡って非常に重要な意味を持っていると確信しています。これから平和構築の分野でキャリアを伸ばしていこうという方には、本事業は非常に有効な選択肢の一つになるのではないかと思いますので、もし、ご関心のある方は是非思い切って本事業に応募し、研修後に次のステージへと羽ばたいて行かれることを願っています。